



平成 29 年 9 月 28 日

「気になる妊産婦」支援のためのシンポジウム開催 岡山発のシステムから課題解決へ 「虐待とメンタルヘルス」の視点で支援体制強化

岡山大学大学院保健学研究科は 9 月 30 日、公開シンポジウム『岡山発の「妊娠中からの気になる母子支援」～次のステージに向けて～』を開催します。岡山県の多くの方々の協力のもと、2011 年に始まった「妊娠中からの気になる母子支援」連絡システムの運用が 7 年目を迎えました。このシステムは、今まで産婦人科医や助産師などの産科スタッフが気にしながらも見過ごされてきた「気になる妊産婦」を、民間と行政が連携して支援を始める岡山発のシステムで、現在は全国に普及しつつあります。

今回、このシステムで連絡があった過去の事例の解析から得られた課題や、我々が実施した岡山県の虐待報告・相談事例の解析から得られた課題を公表し、社会的リスク因子の中でも特にメンタルヘルスの問題を抱えた「気になる妊産婦」の支援のために、システムの新たな展開について議論します。また、最近脚光を浴びている出産・子育て支援拠点「ネウボラ」についても話題を提供します。

<開催概要>

名 称：岡山発の「妊娠中からの気になる母子支援」～次のステージに向けて～
日 時：平成 29 年 9 月 30 日（土）13:30～16:00
会 場：岡山大学鹿田キャンパス医学部保健学科棟 3 階 301 大講義室
(岡山市北区鹿田町 2-5-1)

<背 景>

産科施設は、母子と社会との最初の接点であり、産科医師、助産師による妊婦への医療的な支援が行われています。しかし、分娩がすみ 1 ヶ月健診が終了すると「何となく気になる母子」に心配を感じながらも、その懸念は産科施設からどこにも伝わることはなく忘れ去られてしまいます。

このように、産科医療の中で医学的な視点でのハイリスク妊産婦に対して発見・治療するためのシステムはできあがっていますが、未婚や未成年の妊婦、望まない妊娠、貧困、自らも DV 被害を受けているなどの社会的リスクを持つ妊産婦へ対応するシステムの構築は全国的に遅れています。このため、産科には通院していながら、社会的な支援の網目からこぼれ落ちてしまう妊産婦、母子も多く見られます。

岡山県では、ある虐待事例の発生を契機に産婦人科医会が動き出し、2011 年、行政との連携を深めた「妊娠中からの気になる母子支援」連絡システムを構築し運用を開始しました。このネットワークの担い手は、産科スタッフである産科医、助産師と母子保健行政の



PRESS RELEASE

担当者、保健師のみならず、小児科医、子育て支援グループ、障害児支援グループなど多様な職種となっています。

岡山県ではさらに、児童相談所への虐待通告・相談事例の解析も、他の都道府県に先駆けて実施されており、その中で各種の課題が明らかになりました。また今回、「妊娠中からの気になる母子支援」連絡システムの運用も7年目を迎え、その連絡事例の背景を分析しました。本シンポジウムでは、これらのデータを公表するとともに、岡山県における母子支援システムのさらなる向上のために議論します。

特に、両調査で明らかになった「虐待とメンタルヘルス」の課題を明らかにし、精神科医などのメンタルヘルスの専門家との連携に向けて議論します。また、近年注目されているフィンランド発の出産・子育て支援拠点「ネウボラ」についても話題提供します。

<お問い合わせ先>

岡山大学大学院保健学研究科

教授 中塚幹也

(電話番号) 086-235-6538

(FAX番号) 086-235-6538